The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中井履軒・上田秋成合賛鶉図について
Author(s)	飯倉, 洋一; 濱住, 真有
Citation	懐徳堂研究. 2012, 3, p. 3-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24659
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中井履軒・上田秋成合賛鶉図について

飯倉洋一
濱住真有

一　履軒・秋成合賛鶉図の出現

平成二十二年十一月四日、ある古美術商から、履軒秋成合賛の鶉図一幅があるという連絡を受けた。所蔵者は、同年十一月三日に、大阪歴史博物館で催された懐徳堂資料展にちなむ湯浅邦弘教授の講演を聴講され、その幅を大阪大学に寄贈したいという。履軒秋成合賛鶉図といえば、かつて雑誌『上方』第四十五号（「上田秋成号」昭和九年九月）十六頁に「森繁夫氏蔵[1]」として掲載され、その後、行方が分からなくなっているものが思い浮かぶ。『懐徳堂事典』（大阪大学出版会、平成十三年）にも、「中井履軒」に「鶉居」の項目をたて、「かつて上田秋成と中井履軒とが合賛した鶉図一幅があったという」と、鶉図に触れている。日をあらためて、古美術商が示した写真を見せていただくと、はたして『上方』所載の写真と同じものである。平成二十三年二月二十五日、湯浅教授と飯倉とが、所蔵者の丸山保幸氏宅に出向いて原物を拝見、履軒・秋成ともに真蹟に間違いないだろうと鑑定し、懐徳堂記念会を窓口に寄贈を受け入れることが決まった。

履軒・秋成の合賛した画は他に知られておらず、両者の交遊が具体的に証されるモノは、本幅（**図1**）以外にはない。その意味で、本幅が、懐徳堂記念会百周年という記念すべき年に、七十七年ぶりに出現したことは、きわめて有意義である。同年四月二十一日には、大阪大学大学院文学研究科に、寄贈者の丸山保幸氏をお招きして、片山剛文学研究科長（懐徳堂記念会常務理事）より、感謝状が贈呈された。

後述するように、明治末ごろには、本幅を中井木菟麻

呂が模写している（図3）。もっとも、だからといってその時点で懐徳堂に存在したとは確言できない。少なくとも昭和九年の時点では前述のように森繁夫の所蔵であった。昭和九年九月二十五日から二十九日に長堀高島屋で開催された上田秋成遺芳展覧会[2]で、「森繁夫氏」所蔵品として展観されたが、その展観札と思われるものが本幅とともに保管されている。その後、寄贈者の御尊父丸山保氏の手にわたったようである。

保氏が平成元年に「入手あらましの記録」として、記憶をたどって書いた覚書に、「昭和二十八年ごろ入手」とあり、入手先は「森繁夫遺族」となっているという。森繁夫の没年は昭和二十五年であり、その後古書店か紹介者を通じて入手したものと推測される。昭和二十八年は、保氏四十六歳であった。なお保氏が森繁夫から譲り受けたものは他にもあったという。本幅は、一時期大阪城天守閣博物館に貸し出された。保幸氏が天守閣博物館に問い合わせて下さったところによれば、昭和三十一年四月から昭和三十二年八月までが貸し出し期間であった。以上は保幸氏の御教示によるところである。

二　本幅の基本データ

○作品名　中井履軒・上田秋成合賛鶉図
○作者名　筆者不明。賛者のうち、題詩は中井履軒、和歌は上田秋成。
○所蔵者　懐徳堂文庫
○旧蔵者　森繁夫・丸山保・丸山保幸
○員数　一幅
○材質・技法　絹本着色
○法量　本紙　縦三三・四×横四三・七センチメートル。
中回し　縦五二・五×横五四・五センチメートル。
○成立　着賛は寛政末から享和頃か。制作時期はそれを少し遡るか。
○署名・印章
筆者の署名・印章なし。
履軒詩に、署名「履軒幽人題」（墨書）、印章「隠居放言」（白文方印）「天楽」（朱文長方印）、秋成和歌に署名なし。印章「阮」「秋成」（白文連印）。

図１　中井履軒上田秋成合賛鶉図　懐徳堂文庫所蔵

図２　中井履軒上田秋成合賛鶉図　懐徳堂文庫所蔵

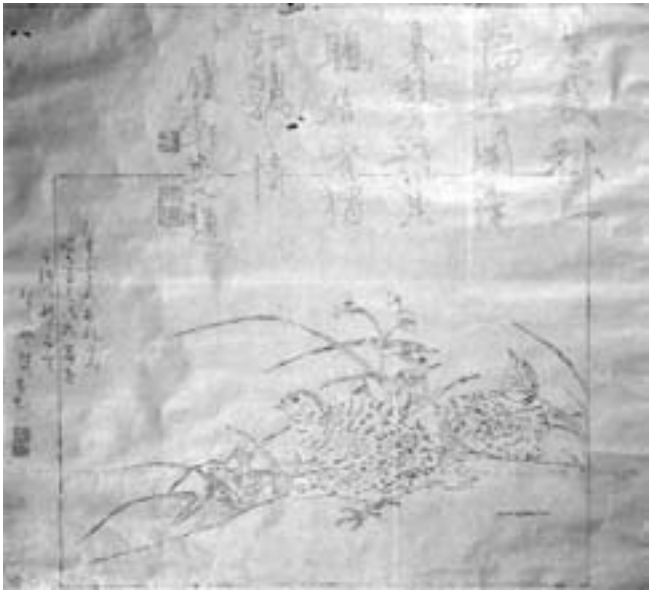

図３　中井木菟麻呂筆　中井履軒上田秋成合賛鶉図（模写）　懐徳堂文庫所蔵

○付属品その他

杉一重箱入り。中井木菟麻呂による箱書（墨書、昭和八年四月）あり。蓋表に「画鶉一幅　履軒秋成併題」（墨書）、蓋裏（墨書）は左に記した。箱の中に、昭和九年長堀高島屋にて開催された上田秋成遺芳展の展示札あり。「履軒秋成合作鶉之図　森繁夫氏蔵」（墨書）のうち、「森繁夫氏蔵」を棒線で消し、「布施市　丸山保氏蔵」を書き添える。（布施市は昭和十二年四月一日から昭和四十二年一月三十一日まで存在）

中井木菟麻呂の箱書（蓋裏、墨書）は左の通り。句読点を付し、後に書き下し文を添えた。

画鶉不審筆者。履軒幽人淡墨題詠、上田秋成国風和之。履軒無地起楼台、鶉居六遷無常処。随処著書留五万余巻、如鶉之墜卵於草間。其所誦詩曰。「誰也之毛　仮能耶登里爾　須満瑳羅牟　仮廼世洞住武仮乃身那礼波」。展而対之、覚秋気満席。秋成亦無定居。称鶉舎。資性相似二人、併題合双璧於一幅。可不宝重哉。昭和八年癸酉孟夏　水哉館後人天生（中井木菟麻呂）記

画鶉、筆者を審らかにせず。履軒幽人淡墨にて題詠し、上田秋成国風にて之に和す。履軒楼台を起つるの地なく、鶉居六遷、常処なし。隋処に書を著し、五万余巻を留むるは、鶉の草間に卵を墜すが如し。その誦するところの詩に曰く。「誰やしも　仮のやどりに　すまざらむ　仮の世に住む　仮の身なれば」。展きて之に対へば、秋気席に満つるを覚ゆ。秋成亦た定居無し。鶉舎を称す。資性相似の二人、併題して双璧を一幅に合す。宝重せざるべけんや。昭和八年癸酉孟夏　水哉館後人天生記す。

「水哉館」は履軒のこと。「天生」は木菟麻呂で履軒の曾孫。箱書中「履軒無地起楼台」は、履軒「天楽楼の記」（『履軒弊帚』所収）に、「幽人蓋無地起楼台也、乃楼斯楼也」とあるのを踏まえている。天楽楼は履軒が借りていた借屋の二階の一室で、そこを天楽楼と称した。またいつも口ずさんでいたという和歌「誰やしも　仮のやどりに　すまざらむ　仮の世に住む　仮の身なれば」は、ほぼ同内容の歌が、履軒の歌集『越吟』（大阪大学附属図書館懐徳堂文庫所蔵）第三に二首ある。いずれも詞書

とともにに引いておこう。

秋の田のかれいほなればうきことはおはすらんと
人のいひければ
誰やしも仮のやどりにすまざらん仮や世にすむ仮の身なれば
家なくてかたつむりをかりてすめることよと笑ふ
人ありければ
誰やしもからぬ栖のあらばこそ仮の世にすむ仮の身なれば

三　履軒の詩について

悲哉秋一幅　悲しきかな秋一幅
若聞薄暮声　薄暮の声を聞くがごとし
誰其鶉居者　誰か其れ鶉居する者
独知鶉之情　独り鶉の情を知らんや
履軒幽人題
「隠居放言」「天楽」

「もの悲しいなあ、秋にふさわしい一幅の画を見ると、薄暮に鶉の鳴く声が聞こえるようだ。どうして鶉居（のように野住・不常住）するものだけが、鶉の情を知っているだろうか（誰でもこの画を見ると、鶉の情がわかるだろう）」の意である。[3]この鶉画の醸し出す悲しみの情は、鶉居すなわち不常住の経験のないものにもわかるということで、画を賛しているわけである。履軒は「古風の詩賦を喜びて誦し」（『履軒古風』自序）た人であり、本詩も平仄の制約から自由である。

「鶉居」は、『荘子』外篇天地篇十二の「夫聖人鶉居而鷇食、鳥行而無彰」（夫の聖人は鶉居して鷇食し、鳥行して彰るること無し）を典拠とする。岩波文庫『荘子』第二冊の金谷治訳を挙げれば、「かの聖人は鶉のように居処を定めず、雛鳥のように与えられるままに食べ、鳥のように自由に飛び回って、その足跡を残しません」という意味である。『経典釈文』に「鶉居」を釈して「如鶉之居、猶言野処、謂無常居也」といい、野住、無常居の象徴とされている。

しかし、『荘子』の「鶉居」には秋のもの悲しさは見られない。むしろ、履軒詩には、藤原俊成の「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」（『千載和歌集』・『無名抄』など）という有名な歌に代表される、秋のわびしさとともにある鶉のイメージがある。

この詩は、履軒の詩集『履軒古風』に収められている。

書名のように履軒は懐徳堂文庫所蔵の履軒自筆本には、「鶉居題鶉画」と題して載るが、幅の詩と字句の異同は全くない。また、本詩集は、ほぼ年代順に並べられているが、この詩は、「癸丑」（寛政五年）と、「丁卯」（文化四年）の間に位置するから、詩の成立および画賛の成立もおおむねその時期と定めて置いてよいだろう。

印章の「隠居放言」「天楽」は、木菟麻呂によれば、晩年の筆跡に最も多く用いられる（『懐徳堂印存』履軒印影の「附言」）。このうち「隠居放言」印は木菟麻呂所有の竹山・履軒らの印章を懐徳堂記念会が借りて作成した印譜『懐徳堂印存』（懐徳堂記念会、明治四十四年）に載せるものと同じである。しかし「天楽」印については、履軒は後にこの印を失ったらしく『懐徳堂印存』には、これを載せていない（別の「天楽」印は載せる）。だが履軒の印であることは、『懐徳』七九号（平成二十三年一月）に寺門日出男氏「中井竹山・履軒の贋作書画について」により印影が紹介された、履軒自筆稿本『雕題』の蔵書印「天楽」の印影と同じであることから疑いない。ちなみに『環湖帖』（大阪府立中之島図書館所蔵）に捺された「天楽」印も同じ印章である。同帖を実際に見ると、やはり「隠居放言」印と共に捺されている。なお「天楽」は先述の履軒の書斎名「天楽楼」にちなむものである。

四　秋成の歌について

むすふよりあれのみ
　まさるくさの庵を
　うつらのとこと
　なしやはてなむ（「阮」「秋成」）

「ここに住みかとして構えて以来、荒れ放題のこの草の中の庵を、最後には鶉の住みかとしてしまうことだろうか」の意。筆跡は寛政末から享和にかけてのものと見られる。印章の「阮」「秋成」は白文連印（墨印）。同じ連印が実践女子大学附属図書館山岸文庫所蔵『不留佐登』や、大阪府立中之島図書館所蔵『〔秋成自筆草稿〕』（『藤簍冊子』「秋芽」の異文）に捺されている。

浅野三平『増訂秋成全歌集とその研究』（おうふう、平成十九年）を検すると、該歌は『藤簍冊子』『鶉の屋』『麻知文』に載るものである。

『鶉の屋』によれば、秋成は天明七年の四月二十日あ

まりに、「むかしの長柄の浜松陰に、もとよりのしるべして、あやしの小家に移」って来た。一度は草を刈り払ったが、深い雨の中でいつしかもとの草原になったというので、愚痴がつい出てしまい、「むすぶよりあれのみまさる草の庵を居ず鶉の床となしやはてなん」と口ずさみ、

まことや、鶉といふ鳥は、常のすみかをさだむる事なし。露けきあら野、或は垣ねの葉がくれも、しばしがほど身をやすからしむるとや。皺かきたり、やつか髭霜おけるにも、猶住つかん所だにさだめず、をちこちしありくあさましさを、かれにだもあえなばやはのしたなげきして、いほりの名を鶉の屋と呼事となりぬ。

と述懐した。また秋成の歌文集『藤簍冊子』巻二には、常居しない己のありようを歌う一連がある。

すみかさだめず、をちこちしあるくを、今はいづこにと、人のとひければ、
風の上に立まふ雲のゆくへなくあすのありかは翌ぞ定めん
とこたへしかば、爪はじきして、憎きものにいふとなん聞こえし。
又長柄の浜松陰に、かりほつくりてすむとて、
むすぶより荒れのみまさる草の庵を鶉の床となしやはてなむ
庵を鶉居と名付しは、聖人鶉居鷇食食の謂にあらず、鶉は常居無しと云によれるなり。此いほりに、ある夜ぬす人入て、いさゝかある物をかづきもていにけり。あしたおもふ。
我よりもまづしき人の世にもあればうばらからたちひまくぐる也

「鶉の床」は和歌では常用され、「荒れる」イメージがある。藤原家隆の私家集『壬二集』冬に「すみ絶えぬ鶉の床も荒れにけりかれのとなれる深草の里」、『六百番歌合』「鶉」の藤原定家の歌に、「月ぞすむ里はまことに荒れにけり鶉の床をはらふ秋風」など。秋成の和歌はその伝統を踏まえたものである。

『麻知文』では、この地にしばらく住んだものの、「くせち」（口舌＝言い争い）が発生して住みにくくなったとして、該歌が詠まれたことになっている。

ちなみに『藤簍冊子』巻六には「鶉居」と題された二つの文章がある。最初の文章が、淡路庄での生活を描い

たものである。

五　秋成と履軒

秋成と履軒の交遊を具体的に示すモノは、本幅のみであるが、秋成が晩年の随筆『胆大小心録』では、兄の竹山とともに履軒について述べた箇所がいくつかある。特に有名なのが、二六段で、

段々世がかわつて、五井先生といふがよい儒者じやあつて、今の竹山、履軒は、このしたての禿じや。（中略）竹山は山こかしと人がいふ。山はこけねど、こかしたがつた人じや。履軒は兄とちがふて、大器のやうにいふが、これもこしらへ物じや。老が幽霊ばなしをしたら、跡で、そなたはさつても文盲なわろじや、ゆう霊の狐つきじやのと云事はない事じや、狐つきといふは、皆かん症やみじや、と大に恥しめられた。（中略）学校のおとろへ、この兄弟で徳がつきたかしらぬ。

などとこき下ろしている。親しい友人に対して悪口を言うのは『胆大小心録』の特徴で、この文章もその例に洩れない。他に、二九段・五二段でも履軒に触れるが悪口に変わりない。

他方履軒が秋成について直接言及した文章は知られていない。しかし、先述した履軒の歌集『越吟』（履軒自筆、懐徳堂文庫所蔵）に、次の歌がある。

うづらの屋何某におくれりける歌

かりにだにゆきても見まし鶉野や鶉と鳴て待人もがな

この歌は『伊勢物語』一二三段を踏まえている。深草に住む女に飽いて、「年を経て住みこし里を出ていなばいとど深草野とやなりなん」と女に贈った男の歌に対する返歌として、「野とならば鶉となりて鳴きをらんかりにだにやは君は来ざらむ」と詠む。『古今和歌集』雑下（読人しらず）では、「野とならばうづらとなきて年は経むかりにだにやは君は来ざらむ」とあり、「鶉と鳴きて」が履軒歌と同じ。「うづらの屋何某」を鶉と化して男を待つ女に見立てて、会いに行きましょうという挨拶であろう。「うづらの屋何某」が秋成であると確言できないが、可能性はある。

六　鶉図について

季節は秋。横長の画面に二羽の鶉が、ツユクサと取り合わされて描かれている。画面向かって左の鶉は、左方を向いて佇んでおり、右後方の鶉は上方を見上げている。手前の鶉の佇む土坡は、刷毛のようなものを用いて薄い墨で塗り込められている。ツユクサの花には群青、茎や葉には濃淡二種の緑（濃い緑は葉の表）、茎の節の部分に赤、鶉の毛には代赭、毛の先端やツユクサのおしべに胡粉、鶉の足と目、ツユクサの葉の一部（枯れた葉の表現）および花のおしべの先端には橙という彩色が見られる。本図には、作者を示す署名・印章は認められない。

本幅では、興味深いことに、中回しと本紙を跨がって、中井履軒が絵の枠外から、上田秋成が絵の枠外へと着賛をしている。本紙部分には二者が（とりわけ着賛の文字がいつも大ぶりな履軒が）賛を寄せるための余白が十分に残されているとはいえず、本図は、着賛を想定して描かれた絵ではなく、着賛は、既存の表装済みの鶉図に対して、履軒、秋成の順に、即興的に行われたものと考えられる。[4] 二羽の鶉のうち、向かって右の一羽は上方の履軒の賛を見上げ、手前のもう一羽は、左の秋成の賛の方を向いているように見えるが、もともと描かれていた二羽の鶉の向きに従うかたちで二者の着賛位置が決められたものと推察される。

さて、本図の構図や形、描法や着色の方法に近似する先行作例を求めていくと、江戸時代前期に活躍した絵師で、室町時代に途絶えていた宮廷絵所預の職に就いて土佐派を再興し、江戸時代の土佐派の礎を築いた土佐光起（元和三―元禄四）の鶉図、たとえば「秋草鶉図」（静岡県立美術館所蔵）（**図4**）、「秋圃双鶉図」（『日本画大成』第二巻　大和絵〈二〉所載第一〇三図）（**図5**）などに行き当たる。[5] 光起は、中国宋代の画院画家・李安忠筆との伝承がある鶉図（今日、例えば根津美術館所蔵本などが知られる）[6] を受容し、配置や取り合わせる植物などにアレンジを加えながら、数多くの鶉図を手がけていることが知られている。[7] 本図は、光起画の鶉図を継承するものといえようが、光起画の毛描きなどに見られる繊細で綿密な描写と彩色が見受けられるものではなく、制作時期は、履軒、秋成の着賛がなされた同時期まで下る可能性も十分に考えられる。

なお、懐徳堂文庫が所蔵する資料（第二次新田文庫）に、中井木菟麻呂（天生、黄裳はその号）による本幅の摸写（まくり）（**図3**）がある。「鶉の里　黄裳模写双鈎」（墨書）

図４　土佐光起筆　秋草鶉図　静岡県立美術館所蔵

図５　土佐光起筆　秋圃双鶉図（『日本画大成』第2巻 大和絵<2>所載第103図）

という題紙一枚を伴うもので、明治四十四年一〇月六日刊行の新聞紙を筒状に丸めて薄葉紙で包んだものを芯としてこれに巻いて保存されている。[8] 実線で囲まれた本紙部分の法量は、縦三三・五×横四三・〇センチメートル。本図とほぼ法量が合致するものであり、絵と文字の輪郭のみを写し取る「双鈎」というやり方で、敷き写しがなされたものである。[9] これは、おそらくは、木菟麻呂が、昭和八年に本図の箱書（蓋裏）を記すよりも以前に（明治末頃か）、本幅を実見して模写を行っていたことを示しているものと考えられる。

以上、署名・印章がない本図の作者を具体的に比定することは困難であり、これについては土佐派系統の絵師、着賛者の中井履軒、あるいは専門の画家ではない絵の嗜みのある人物によって描かれた可能性なども含めて考えてみる必要があるのかもしれない。[10] 本幅は、履軒と秋成の二者の交遊を示す資料として、また二者が同席して鶉図に着賛した時の即興的な雰囲気を今に伝える作例として、極めて重要であるといえる。

注

（1）明治十五年岡山県生まれ。号小竹園（ささぞの）。昭和二十五年没。摂陽汽船・大阪商船等海運業の要職に就き、国文学関係文献の蒐集家、国学者歌人の伝記研究者として著名。その蔵書は現在大阪市立大学に収められている。

（2）高島屋美術部五十年史編纂委員会編『高島屋美術部五十年史』（株式会社高島屋本社刊、昭和三十五年十月）により確認した。『上方』四十五号（昭和九年九月）には、その告知が一頁を割いてなされている。『高島屋美術部五十年史』については大阪大学橋爪節也教授のご教示を得た。

（3）解釈については大阪大学浅見洋二教授のご教示を得た。

（4）大阪大学奥平俊六教授のご教示による。

（5）土佐光起と鶉図に関しては、以下の論考に詳しい。実方葉子「土佐光起の鶉」『茶道雑誌』第六十巻第十一号（平成八年）一〇九―一一六頁。竹内美砂子「秋草鶉図屏風小考」『名古屋市博物館研究紀要』第十二巻（昭和六十三年）一―十一頁。藤島幸彦「土佐光起の鶉図―東博本『秋郊鳴鶉図』『野菊鶉図』を中心として―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第九集　創立百周年記念号（昭和五十八年）三〇五―三一五頁。

（6）根津美術館所蔵本は、足利第六代将軍義教の鑑蔵印と考えられる「雑華室印」を伴い、室町時代に日本に伝来したと考えられるもの。宮崎法子『花鳥・山水画を読み解く―中国絵画の意味』（角川書店、平成十五年）二二九―二三〇頁では、中国で鶉の図は安らかさの象徴であり（中国で鶉の意である

鶉と安が同音〈an〉)、宋代に多くの鶉図が作られていることからも大変人気のある画題であったことが指摘されている。前掲注5実方論文では、光起の鶉図に、中世以来の和歌における鶉のイメージ、例えば「人知れずひそかに暮らす鶉の姿」などが投影されていることを指摘する。

(7) 前掲注5藤島氏論文では、調査で実見したものと各種写真資料の収集によって氏が確認した光起筆とされる鶉図は一〇九点に及ぶという。

(8) 懐徳堂文庫の所蔵作品のうち、木菟麻呂による模写も現存する作例に、岩崎象外筆・中井履軒賛「解師伐猿図」がある。

(9) 双鈎については、奥平俊六編『懐徳堂ゆかりの絵画(阪大リーブル)』(大阪大学出版会、平成二十四年三月刊行予定)を参照のこと。

(10) 懐徳堂文庫所蔵の履軒作品に、「左九羅帖」、「墨竹図」(五井蘭洲筆)模写がある。

【図版出典】

口絵及び図1―3　濱住が撮影した。

なお、口絵3及び図3の撮影では大阪大学藤岡穣教授の協力を得た。

図4　静岡県立美術館より写真原板の提供を受けた。

図5　『日本画大成』第二巻　大和絵〈二〉(東方書院、昭和七年)第一〇三図

【補記】

本稿は第五節までを飯倉が、第六節を濱住が主として執筆し、意見交換した上で全体の体裁を整えた。

また、本稿を成すにあたりお世話になった丸山保幸氏・懐徳堂記念会・大阪大学附属図書館・大阪大学大学院文学研究科貴重書室に深謝申し上げる。

なお、本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)「近世上方文壇における人的交流の研究」(研究代表者・飯倉)の研究成果の一部である。